
ゆく年来る年

櫛方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆく年来る年

【NZコード】

N3412D

【作者名】

櫛方

【あらすじ】

大晦日～年明けまでの心境及び出来事を、一人一人をクローズアップして時間順に描きます。

PM3・00（前書き）

初めて投稿させて頂きます。拙い所もありますが（特に改行に自信
がありません）ご了承下さい。
最初は毛利蘭から
です！

とある有名洋服店のロゴ入りの紙袋のテープを、ビリッと剥がす。

その黒髪の少女、毛利蘭は、親友の鈴木園子にカウントダウンパーティーに誘われていた。

このパーティーは、社交的な物では無く、鈴木家の面々と親しい人が集うパーティーなのだという。だから、蘭以外にも、園子のクラスメートが何人か誘われていた。

「そんなにカタいもんじやないけどさ、せっかくなんだし、可愛い恰好していきなよ～」

との園子の勧めにより、先日ショッピングセンターで買つて来た服。それを袋から出し、眺める。

胸元に大きなリボンをあしらつた、裾の形が綺麗な、濃いめの色の上品なワンピースだ。ワンピースというより、ドレスと言つた方がいいかもしれない。園子も【絶対似合う!】と絶賛した物だ。園子は、それに合うこれまた上品なショールを貸してくれた。

彼女はふと思つ。このドレスを着た姿を、新一が見てくれればいいな、と。

無理だと言つ事は分かつていた。クリスマスが過ぎた頃、新一から電話でそう言わされたから。【カウントダウンは一緒に】の言葉を期待した蘭だったが、その期待はあっさり打ち砕かれた。

結局、クリスマスにも大晦日にも会えなかつた。蘭は溜息をつく。来年、私達はどうなるんだろう?」この調子で、一年も一年も待たなきやいけないのかな?来年も、そのまた来年も、悲しい思いで過ぎなきやいけないのかな?

新一は【ごめん】つて言つた。【パーティーを楽しんで来い】とも。でもさ、謝つてくれたつて悲しいものは悲しいんだよ、新一。あなたは事件に夢中になつてゐるからいいかもしないけど、私は…

分かつてゐよ、新一を責めても仕方ないつてことぐらい。と「うより、私にはこれ以上責められない。事件を追いかけてない新一なんて、新一じゃないと思つから。

でも、会えないのは悲しいよ。全く、悲しい気持ちを引きずつたまま、新しい年を迎えるきやならないじゃない。ただでさえ、大晦日は、今年あつた色々な事を思い出す日。余計切なくなっちゃうじやない…

会いたいよ…新一…急に涙が頬を伝つ。泣いちゃダメだと蘭は思つ。泣いたら、せつかく買った服にシミが付いちゃうし、それに、それに…

…新一ならきつと言つだらう。【その綺麗なドレスに涙は似合わない】と。あの気障な口調で。

そう考へると、自然に笑みが零れた。そして思つ。ああ、やつぱり私の心は新一でいっぱいなんだな、と。少し苦笑いしつつ、鏡の中の、綺麗な服に身を包んだ自分を覗き込む。

「まあまあかな」

自分に微笑みかける。その笑顔には、全くくすみがなくて。

新一は言つてた。【来年には必ず】つて。その言葉を信じよう。来年にはきっと、『日常』が帰つて来る。新一は事件を解決して、二人は高校三年生になつて、一緒に学校へ行つて。

「そうだよね、新一？」

蘭は呟き、そして微笑んだ。

お読み下さりてありがとうございます。いかがでしたか？

三人称と一人称を行き来してみたり、改行が変だつたりと、読みにくくてすみません。

「その人っぽい」言い回しを考えるのは本当に難しいです。特に園子の台詞…終わつた…（泣）キャラを壊してすみません。

評価・感想お待ちしています！

よろしくお願ひします！

PM3・30（前書き）

年は明けましたがコナン達の年はまだまだ明けません…早く終わらせます… 次は江戸川コナンです！

江戸川コナンは、ベッドの上に座って悩んでいた。

事の起り方は、少年探偵団に引張り出され、米花公園で遊んだ時。

「寒いのによく遊ぶ気になれんなー…」

呆れてコナンが白い溜息をついた時、歩美が言ひ出したのだ。

「今夜みんなでカウントダウンパーティーをしよう」と。

コナンは小さく舌打ちをした。もしパーティーなんてやる事になつちまつたら、オレも引っ張り出される事請け合つだ。それは避けたかった。

蘭と一緒に、園子の方のパーティーに行ひと想ひていたから。セイドンが言ひた。

「お前らなー…今からやひつたつて、無理に決まつてんだろーが。第一場所はどーある。準備とかだつてしまひやいけねーだろ？」

「そつか…」

落ち込んだ顔の探偵団に、コナンはひづつひづつ。

「だひ?だから止めとひつて。家でやりやーーだ。カウントダウングリこよ。」

「せうだ、阿笠博士の所でやれば良いじゃないですか!」

光彦の一言で、探偵団の瞳が再び輝き出した。

「そうしようそうしよう…」

「ナイズだぜ、光彦！」

「博士に頼めば、きっと食べ物とかも準備してもらえますよ…」

「食いモン…うな重食えつかな！？」

「全く、元太君はうな重の事ばっかりなんですから…」

「でもさ、大晦日なんだし、きっと食べられるよ…」

「そうだよな、歩美…」「おーお前らな、博士だつて迷惑するだろ

…」

「じゃあ今から聞いてきましょ…」

「うん…」

「おう…」

「おーい…」

コナンの制止の声も空しく、三人は駆け去ってしまった。

コナンは溜息をついた。灰原に助けを求めてくても、いつかいつに限つていない。それにあのお人よしの博士の事だ、すぐOKして張り切つて準備するに決まってる。コナンは三人を追うのを諦め、探偵事務所へ帰つて来たのだった。

と言つ訳で。

コナンは蘭の方のパーティーと、探偵団の方のパーティーとを秤にかけていた。

蘭の方のパーティーへは行きたい。アイツの側に居てやりたいから。けどなあ…探偵団の方のパーティーを、蘭を理由に断ると、また問い合わせられそうで怖えし、アイツらに嘘もつきたくないねえし。それに…

それに、灰原。アイツの事だ、どうせまたなんか下らねえ事で思い詰めてるんだろう。それも大晦日つて事でその思い詰め方もグレードアップだ。それとも取り憑かれたように研究してつのか?…どっち

にじゅほつとけねえよな…

ここまで考えて、ハツと氣付いた。おいおい、オレは何をこんなに真剣に悩んでんだ、と。

今の江戸川コナンとしての生活に、こんなにも溶け込んでいる自分にゾッとする。ダメだ、このままじやホントに江戸川コナンになつちまつ。蘭の側にいるに決まつてんだろーが！

だがしかし…やつぱりオレは江戸川コナンなんだよな、と、頭の中で声がする。アイツについて行つたつて、所詮オレは、工藤新一の姿ではない。今のオレじや、どーにもならねーんだよな…

この一年で、随分弱気になつたもんだよな…コナンは苦笑する。黒の組織には始終ビクビクしてつし、蘭の事だつてそうだ。考えてみりや、蘭に正体を明かす事ぐらいいつでも出来るんだよな…アイツを危険に巻き込むのが恐い、ただそれだけの理由。正しい事をやつてるつちややつてるんだが、それでも、蘭を辛い目に呑わせちまつてる。

けど…コナンはふと思つた。これが本当に正しい事なのか？

蘭に正体をバラさない…これだけで、本当に蘭を危険から遠ざけられるのか？

オレが関わる事件には、凶悪な物や、組織絡みの物もある。現にアイツは何度も事件に巻き込まれてる。巻き込まれんのも当然だ。一緒に暮らしてんだぞ？行動だつて一緒にになるに決まつてんじゃねーか。それに…

それに、何時オレの正体がバレるかしれねえ。そしたら一番最初に

狙われんのは誰だ？オレ自身かもしんねーが、正々堂々と来るよつ
な奴らじやねえ。蘭だ。アイツが巻き込まれるに決まってる。

コナンは思わず声に出して笑ってしまった。何だ、アイツを守つた
つもりになつてたが、全然守れてねーじやねーか。

じゃあ、オレは、ここを出れば良いんだらうか？
違う。頭の中で強い声がした。

何故だ？コナンは自問する。江戸川コナンが、蘭にとつて何の得に
なる？オレは小一のガキだ。アイツを守る事なんて出来やしない。
それに、アイツが今必要なのは、工藤新一ただ一人。自惚れじやね
え、見てりや分かるさ。江戸川コナンの存在は、せめてもの気休め
程度。ただの気休めが、蘭を危険にさらしてまで、側にいる必要が
あんのか？

「工藤新一」は、随分遠い存在になつちまつたなあ。コナンは苦笑
する。コナンは考えた。どんな謎を解く時よりも真剣な瞳で…

オレは、一体、どうするべきなんだ？

しばらくして、コナンはフツと息をつき、そして笑つた。何だ、簡単
な事じやねーか。コナンは思つ。こんな事も分かんねえようじや、
高校生探偵も形無しだな。

そつ。全てはコナン自身のため。『正体を隠して思い人の家に居候』
最初は状況的に仕方ない事だったかもしれないが、この状態を続
ける事を選んだのは自分自身だ。変えようと思えば変えられたのに、

そうしようとはしなかった。

蘭の所に居候しているのは、蘭の側にいたいから。蘭を本当に危険に巻き込みたくないのなら、あの時の両親の勧めに従つて海外へ行くか、良くて阿笠邸だらう。そしたら蘭には会えない。

蘭に正体を隠すのは、蘭に心配されたくないから。新一から連絡が来ないと言うだけでも本氣で心配する蘭に、事実を話したらどうなるか、想像に難くない。蘭はしつかりした女性だ。正体をバラしたからつて、その辺でコナンを新一と呼ぶとか、正体を他人に口外する事なんてないだろう。危険とは関係ない話だつたのだ。

ここまで分かつたら話は簡単だ。コナンは思う。姿が小一のガキだろーが関係ねえ。アイツを精一杯守るんだ。よし、来年こそは、黒の組織をとつ捕まえないとけねーな。そして、一刻も早く元の体に戻つて、オレの思いも伝えねーと。

オメーを絶対守るから、だから…

オレの我が儘、許してくれるよな、蘭？

コナンは決意を新たに立ち上がった。そして迷わず、蘭の方のパーティへ行く準備を始めた。

と、その時

「コナン君ー歩美ちゃん達が来たよー博士の家でカウントダウンパーティー やるんだってね！」

「あつ、蘭姉ちや…」

コナンは田を見張った。ドアの前に立っているのは、蘭であつて蘭でなかつた。

美しい。

ショールが風にフワッとなびく。濃い色のドレスが、彼女の白さを引き立て、美しく、上品な女性として田の前に花開いていた。長く綺麗な黒髪は揺れ、瞳は美しく輝いて

「 じゃない？歩美ちゃん達との方がきっと楽しいよね…」

「えつ？あ、そ、そんなこと…」

「遠慮しなくて良いのよ。私は園子と楽しんで来るから じゃあね、行つてきまーす！」

「ちよ、ちよっと蘭姉…！」

蘭は行つてしまつた。これじゃ空回りじゃねーか。でも、オレが蘭

に見とれてたのも悪いんだよな…」 ハンは苦笑する。

「ま、しゃーねーか

」 ハンは齒くと、少し笑った。

お読み下さりありがとうございます。

『蘭を守るため、正体を明かさず蘭の家に居候する』と言つ原作の設定に疑問を感じていたため、書いてみました。

結構長くなってしまいました。すみません…

評価・感想もよろしくお願いします！

PM4:00 (前書き)

次は毛利小五郎です！

「行つてきまーす！」

「おう」

コナンの元気な声にそつけなく返事をすると、毛利小五郎はキツチ
ンまで歩いていった。冷蔵庫を開け、中を覗き込む。が、お目当て
のビールの缶は一本もなかつた。小五郎は、チツ、と舌打ちをする
と、リビングのソファにどかっと座つた。そしてビールの代わりに、
煙草に火をつけ、側に落ちていた新聞を開く。

今年の年越しは、久々に一人なのだ。蘭もコナンも、カウントダウ
ンパーティーに行つてしまつたから。今年は蘭の旨い年越し蕎麦が
食べねえんだよな……小五郎は思う。仕方ねえ、今年はカツラーメ
ンで我慢すつかな……

だが、昔の年越し蕎麦は、カツラーメンが当たり前だつたのだ。
料理が下手なあの女性、英理が此処を出て行くまでは。

英理が家を出て行つてから、来年で11年。その時、小さくて愛く
るしい7才だつた蘭も、もうすぐ18才になる。子供だ子供だと思
つていたが、18才つて言つたらもう立派な大人じやねえか。小五
郎の頭に、柄でもない考えが浮かんだ。

そもそも、一人で正月迎えるつて事自体初めてなんじやねえか？英
理の事は置いといたとしても、蘭が大晦日の日に家にいなつての
は今年が初めてだ。アイツがこの家を出るのも、時間の問題かも知
れねえ。小五郎はふとそう思つ。

だが……もし家を出たとしたら……まさか、アイツ……

あの探偵ボウズと……！？

いや、あんな野郎に蘭は渡さねえぞ。小五郎はそう思いながらも、頭のどこかでは分かっていた。アイツを幸せに出来るのは、探偵ボウズこと、上藤新一だけなのだと。

多分アイツも、近い内に結婚するんだろう。この家に、英理が戻つて来る、その前に。そーいやアイツ、いつもいつも俺と英理を会わせようとしてたつけ。

すまねえな、蘭：

つたく、それにしても、英理も英理だ。いー加減帰つて来いよ！
アイツさえ素直に謝つてくじや、俺は……俺は……

10年もたつのだ、英理がこの家を出て行つてから。いい加減、小五郎が自分の気持ちに嘘をつき続けるのも、『もう限界』だ。英理の事が好きだと言う事、帰つて来て欲しいと思つている事、どれもとつくに自覚済み。

しかし、小五郎は英理に会おうとはしなかつた。意地とプライドが、それを許さないのだ。だが、蘭の地道な働きかけが効を奏し、その意地とプライドが崩れるのももう時間の問題。小五郎がこんな風に、

英理や蘭の事を考へると、いつ事そのものが、異例の事態なのだから。

「アイツに電話でもしてみつかな、小五郎は思った。けどな……特に用がある訳でもねえし、あの冷たい声で『何の用?』なんて聞かれたら……」

「止めとくか。……畜生、なんで女つてのはこんなに厄介なんだ! 小五郎は思考を一旦放棄して、全く読んでいなかつた新聞をめくつた。その時、小五郎の目に飛び込んで来たのは

『今年のカウントダウンは、沖野ヨーロのカウントダウンTVに決定 歌にダンスにセキララトーク、ヨーロと一緒に年越ししましょ』

丸々一面使つた広告に躍る文字と、沖野ヨーロの笑顔であった。

「ヨ、ヨ、ヨー! ちゅわあああんつ……」

躍り上^{アツ}がる小五郎。

「年越し今まで一緒になんて、なんて、なんて幸せなんだああつ! そーだ、ビールだ、ビールが切れてた、買って来なくつちやーーー」

小五郎は、近くのスーパーに駆けて行く。

「どうやら、英理とヨリを戻すのは、もう少し先にならうつだ。

すみません、小五郎のキャラが大分違つてしましました。
でも書いてみたかったんです、
恰好いい、「イイ奴」って感じの小五郎を。いかがでしたでしょうか？
評価・感想お待ちしています！お読み下さりありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3412d/>

ゆく年来る年

2010年10月11日21時38分発行